特集「鬼無里」

かつて海だった鬼無里

―奥裾花渓谷の地質・地形―

田辺 智隆

裾花川の源流域にひろがる、周囲を山々に囲まれた谷の里、「鬼無里（きなさ）」。由緒正しい社寺や、路傍の石神・石仏も多く、多彩なだけでなく、それらの持つ内容も深い。この「鬼無里文化」ともいうべき独特の文化圏は、「鬼女紅葉」や「木曽殿」に代表される豊かな京文化に彩られた伝説の里でもある。さらに、太古にまでさかのぼれば海底だったという証も処々に見られる。ロマンに満ちた谷をさまざまな角度から採り上げてみたい。

奥裾花渓谷の概要

長野市鬼無里地区は市の北西部に位置し、その北端は新潟県と接している。この新潟県境に日本百名山の一つ、戸隠連峰の高妻山（たかつまやま）（標高二三五三m）が聳えている。また、鬼無里の西側は、堂津岳（どうつだけ）（標高一九二七m）から東山（標高一八四九m）、八方山（標高一六六九m）と南南西に続く険しい山脈であり、北安曇郡小谷村、白馬村との境界となっている。

長野市の最高峰、高妻山に源を発した清水沢や地獄谷、小清水沢、堂津岳を源流とする濁川など、山々からのいくつもの沢の水を集めたものが裾花川である。裾花川の上流部は、日本有数の豪雪地帯でもあり、雪解け水が多い。鬼無里地区は、この豊富な水によって大地が削られた地域で、その大部分が険しい地形をもつ山地となっている。また、こうした豊富な水がミズバショウやブナの原生林、モリアオガエルなどの自然を支え、地域に暮らす人々の物語をも育んできた。

こうした水と大地が営む物語の「語り部」が、奥裾花自然園に通じる林道大川線沿いの地層である。ここでは地層が約三kmにわたって連続的に露出しており、「奥裾花渓谷」と呼ばれる。この渓谷で見られる地層や地形を深く読んでいくと、鬼無里がかつて海だったことがわかる。加えて、信州の大地の生い立ちまでも考えさせてくれるのである。今回は、そうした海だった信州が山となり、さらに水によって谷が刻まれていくという物語を読み解いていきたい。

奥裾花渓谷では、この地が海だったときに堆積した地層のほか、地形や動植物など、多種多様な自然現象が見られる。今回は、その自然現象がいつ起こって生じたものなのかを整理して、三つの観点から見ていくことにしたい。まず、第一に地層が海中に堆積したときに生じたもの。二番目は地層堆積後の大地の変動で生じたもの。そして、三番目は水により大地が浸食されたものである。こうした三つの、相互に関連しながら違う作用を読み取ることで、現在の奥裾花渓谷の成り立ちを考えていきたいと思う。

地層が堆積した時にできるもの

まずは奥裾花大橋である。この橋の上流側の対岸に大きな崖（露頭）が見え、左側（西方）に傾いた地層を見ることができる。何枚も重なった地層からは、奥裾花渓谷がこうした地層の重なりでできていることがわかる。

ちょっと離れた位置から、露頭の全体を確認してみる。地層がむき出しになっていると、常に崩れる可能性があるので、落石等の危険がないかの安全確認が大切である。そして地層がどのように傾いているのか、全体を見渡しておくとよい。遠方から見ると〝ゴツゴツ〟して硬い感じを受けるが、砂粒や細かい丸い石ころ（礫（れき））